様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３５４０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０６８３

研究課題名（和文）幼児の身体活動に関するカリキュラム作成への試み－保育現場の実践を意図して－

研究課題名（英文）An Attempt at Designing the Curriculum of Young Children's Physical Activities-With the Intention of Practice in the Childcare Field-

研究代表者
田中　沙織（TANAKA, SAORI）

広島女学院大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：４０５４８７９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児の身体活動の特徴を把握し、保育者の保育実践に対する課題を明らかにすることで、幼児の発達に応じた身体活動の展開方法について示唆を得ることを目的とする。
研究からは、運動発達や保育者の援助によって子どもの身体活動や遊びへの参加の仕方に影響があることが明らかとなった。そこで、保育実践が幼児の身体活動に対してどう寄与したかが可視化できる振り返りのための評価票を開発することとした。
その結果、幼児の身体活動量や強度・動きの多様性・活動の展開の充実だけでなく、保育者の意識が変化し、発達的な意図を有する運動遊びが計画・実施されることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to understand the characteristics of young children's physical activities and identify the issues for childcare teacher's practice so that the appropriate methods for evolving young children's physical activities based on their developmental stages can be suggested.
The research clarified that young children's development of movement and childcare teacher's assistance affect young children's physical activities and the way of their participation to activities. Thus, an evaluation sheet was created to visualize and examine how the practice contributed young children's physical activities.
As a result, it was suggested that the use of this evaluation sheet not only expanded young children's physical activities, strength, movement variety and development of activities but also changed childcare teacher's mindset, so that young children's new physical activities intending for further development are planned and implemented by the teachers.

研究分野：幼児教育

キーワード：幼児　身体活動　評価票　保育者

１．研究開始当初の背景

近年、先進国を中心に世界的に子どもの身体活動量の低下が問題となっている。わが国では、運動能力の長期的低下は社会問題としても取り上げられ、世界的には、小児肥満を代表に、特に健康上の観点からの問題が指摘されている。そのような中、幼児の身体活動の機会を振り返ってみると、わが国の大半の幼児が通い、日中の大部分の時間を過ごす保育現場における身体活動が重要な役割を占めると思われる。2012 年には文部科学省において幼児期運動指針が策定され、幼児の身体活動に関する一つの指標が示されている。しかし、幼児の発達に応じた身体活動を充実させ、体を動かすことの楽しさを子どもたちが感じられるように保育に工夫を凝らすための、具体的な支援方法についてはまだ十分に情報提供されているとは言い難いといえよう。そのため、保育現場における幼児の身体活動の効果的な展開方法について検討することは、必要不可欠であり、喫緊の課題であると言える。

２．研究の目的

（１）幼児後期の身体活動の特徴と身体活動に関する保育実践の実態把握を行う。

（２）身体活動に着目したより良い保育の実践方法について検討し、身体活動の量・質ともにバランスが取れた活動を幼児が主体的に楽しむための保育の展開方法について示唆を得る。

３．研究の方法

（１）幼児の身体活動の現状把握（研究１）

幼児の生活に介在する身体活動を明らかにするために、福岡県の保育所に通う３歳児から５歳児を対象に、身体活動量と運動強度のモニタリングを１週間行った。身体活動量と運動強度のデータ収集にはデータの信憑性が高い多軸加速度計を使用し、同時に具体的な生活内容と身体活動を照合させるための観察調査を実施した。さらに、保護者を対象に幼児の生活全般に関する質問紙調査を行い、幼児の身体活動の現状について把握した。

調査対象は福岡県のＡ保育所に在籍する３歳から５歳の幼児 24 名とその保護者である。調査に際し、保護者に対して紙面で趣意説明を行い、同意を得て実施した。

（２）身体活動に関する保育実践の実態把握（研究２）

保育実践において、保育者が持つ意識やどのような身体活動が行われているかを明らかにするために、福岡県の保育士を対象とした質問紙調査を実施した。調査内容は、３歳児から５歳児で実施している身体活動に関するカリキュラムの作成方法、身体活動に関する保育実践の内容、幼児期の身体活動に対する意識についてである。

調査対象は平成 26 年度福岡県保育協会加入園 417 ヶ園の保育所に所属する全保育士である（1,987 名）。調査に際し、同協会保育士会会長及び研究部会に対して口頭で、各調査対象の保育所所長及び保育士に対して紙面で趣意説明を行い、同意を得て実施した。

（３）研究３に向けての検討

研究２の結果に加え海外の先駆的地域の視察および関係者との協議を踏まえ、各保育施設の立地条件・施設条件・勤務体制・教育保育方針等が非常に多様であり、身体活動向上のための統一されたカリキュラムを用いることは、子どもの個人差や各保育所の独自性を損ないかねないという結論に至った。一方で、研究２から保育者が抱える体を動かす遊びに関する問題点として、身体的な発達や運動機能の発達に対して体を動かす遊びがどう寄与するかが認識できにくいことが明らかとなった。そこで、本研究の目的である、身体活動の量・質ともにバランスが取れた活動を幼児が主体的に楽しむための保育の展開方法を検討するにあたり、申請時に志向していた体を動かす遊びに関するカリキュラム開発ではなく、体を動かす遊びに関する保育の振り返りのためのツールを開発することが必要であるという結論に至った。

（４）体を動かす遊びに関する保育の振り返りのためのツール開発（研究３）

体を動かす遊びにおける幼児の身体活動量・運動強度・動きの多様性・活動の展開を指標として、PDCA サイクルの下、体を動かす遊びに関する保育の振り返りのためのツール開発を行った。身体活動量・運動強度の測定は前出の多軸加速度計を使用し、動きの多様性・活動の展開は観察調査及び保育士へのインタビュー調査にて検証した。

調査は福岡県の私立Ａ保育園で行った。調査に際し、Ａ保育園園長及び対象となる幼児の保護者に対して口頭で趣意説明を行い、同意を得て実施した。

４．研究成果

（１）幼児の身体活動の現状把握（研究１）

３歳児から５歳児までの日内の身体活動量の推移について検討した結果を図１～３に示す。年齢による最大値の差はあるものの、１０時から１１時にかけての主活動の時間帯、昼食後の１４時から１５時の時間帯（３歳児は午睡のためこの時間帯は除く）、夕方１６時から降園までの時間帯という３つの時間帯に身体活動が活発になっていることが明らかとなった。また、各年齢とも短い時間の中で急激な身体活動量の高まりが確認できるが、観察調査と比較したところトイレや教室の移動であることが分かった。さらに、４歳児・５歳児では１２時半から１３時にかけての清掃活動の時間帯にも身体活動量が

高まることが明らかとなった。

以上より、午前のピークについては、保育者が計画的に実施する主活動を中心とした活動であり、活動の場所や環境構成、保育士の援助も計画的になされたものであるが、午後のピークについては、午睡や多数の幼児の降園による異年齢合同クラス編成下や、時差出勤による保育士数の減少に伴う制約のある環境の中で、子どもたちが自ら選択した遊びを展開した結果と捉えることができる。これに加え、短い時間の中で急激に身体活動が高まっている日常的な生活に付随する身体活動（例えば、トイレに行く際の移動等）においても身体活動量・運動強度共に高い値を示しており、幼児にとって体を動かす遊びだけが身体活動を確保する機会ではないことが明らかとなった。一方で、観察結果から、動きの多様性については十分確保されていないことが明らかとなった。特に、幼児が自由に選択する午後や夕方の遊びの中では、いつも気に入った遊びを選択するが故に新しい体の動かし方を必要とする様子は見られず、午前の主活動での経験に依るところが大きいことが明らかとなった。また、運動が苦手な幼児程、午後の遊びの中では、ままごと等の静的な遊びを選択する傾向にあり、鬼ごっこやかけっこを好んで選択する運動が得意な幼児との運動経験の差がより一層開くことが懸念された。

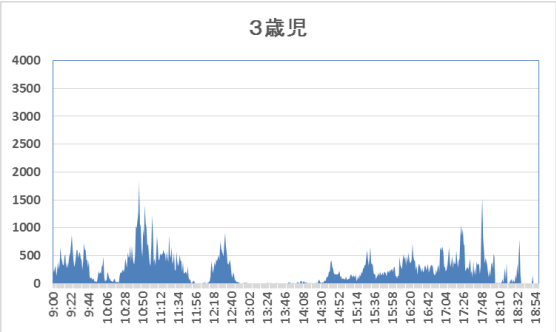

図１　３歳児の身体活動量の日内変動（１週間の平均）

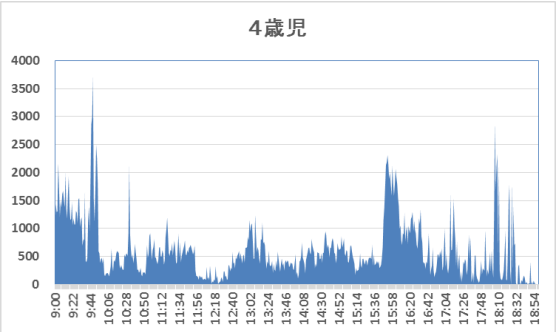

図２　４歳児の身体活動量の日内変動（１週間の平均）

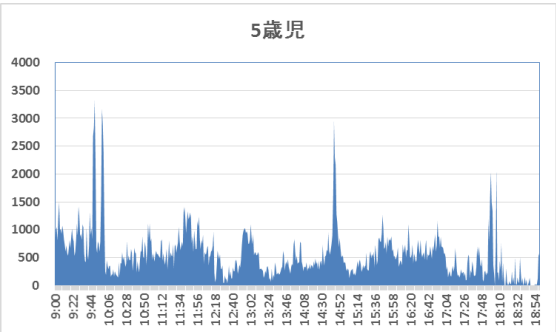

図３　５歳児の身体活動量の日内変動（１週間の平均）

（２）身体活動に関する保育実践の実態把握（研究２）

体を動かす保育に関する実態調査から、保育士が体を動かす遊びに関して最も困っていることは、「遊びのレパートリー」についてであることが明らかとなった(図４参照)。さらに、同調査では、時差出勤のため夕方になると保育士の数が減ることや、それに伴いクラス編成の変更を余儀なくされる園が７割程存在することが明らかとなっている。また、体を動かす遊びに関して最も重視するねらいについては「楽しく遊ぶこと」や「意欲的に遊ぶこと」が上位を占めており、保育士は、限定的な人的・空間的環境の中で、子どもたちが如何に楽しめるかを重視して体を動かす遊びを行っていることが明らかとなったといえる。そのため、遊びのレパートリーに関心が高まり、運動動作の多様性や運動の量・質、個々の運動レディネスといった幼児の発達に重要な点については注目されにくいということが考えられる。

以上を踏まえ、保育現場における幼児の効果的な身体活動の展開方法を検討するにあたり、各保育施設の立地条件・施設条件・勤務体制・教育保育方針等が非常に多様であり、保育者が抱える体を動かす遊びに関する問題として、身体的な発達や運動機能の発達に対して体を動かす遊びがどう寄与するかが認識されにくいことを踏まえると、身体活動向上のための統一されたカリキュラムの開発ではなく、体を動かす遊びに関する保育実践が幼児の心身に対してどう寄与したかが可視化できる振り返りのためのツールを開発することが有効であると考えるに至った。

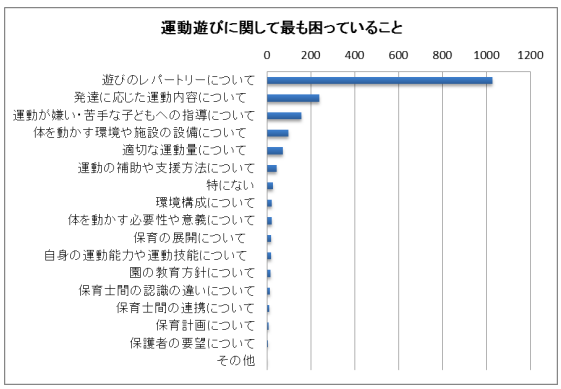

図４　保育士が体を動かす遊びに関して最も困っていること

（３）体を動かす遊びに関する保育の振り返りのためのツール開発（研究３）

体を動かす遊びに関する保育実践が幼児の心身に対してどう寄与したかが可視化できる振り返りのためのツールを開発するために、幼児の身体活動量・運動強度・動きの多様性を測定し、PDCA サイクルにより、ツールの改善を繰り返した。最終的に、本ツールを使用することで、幼児の身体活動量・運動強度・動きの多様性の向上が確認されただけでなく、図５に示すような保育士の意識の変容が確認され、これまで「遊びのレパートリー」に関心が集まっていた保育士において、体を動かす遊びにおけるねらいの明確化やねらいを環境に埋め込んで遊びを発展させようとする姿が確認された。さらに、クラスを全体的に把握するのではなく、発達や運動の好き嫌いの差による個別の支援についても、計画を立てる際に配慮するように変化した。

・ねらいを達成するための支援方法を個に応じて考えるようになった
・身体活動の時間だけはなく強度にも目が向くようになった
・保育士の計画を優先せず、子どもがどこに楽しさを見出しているかを観察するようになった
・保育の中で出現した基本的運動動作について分析的に見つけることができるようになった

図５　体を動かす遊び振り返りツール使用後の代表的な保育士の感想

（４）まとめと今後の課題

本研究では、現代の幼児後期の身体活動の特徴と身体活動に関する保育実践の実態把握を行い、保育現場における幼児の効果的な身体活動の展開方法について示唆を得ることを目的とした。幼児の身体活動については、保育施設の勤務構造や環境によって大きな影響を受けるものの、日常生活に付随する身体活動や保育者が意識的に遊びの中にねらいを明確に持ち、主体的な遊びの中に必要な身体活動量や運動強度、動きの多様性を埋め込むことで必要な運動経験を担保できる可能性があることが明らかとなった。そして、それを促すために保育者の体を動かす遊びに関する振り返りツールを作成した。今後は、発達差のある子どもの運動指導や、運動が嫌いな子どもに対する支援、またこれまで検討されてこなかった、乳児期、幼児前期の身体活動のありかたについても検討する必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①<u>田中　沙織</u>、4・5 歳児の身体活動と運動能力差との関連 ： 幼児における身体活動の実態把握に向けて、広島女学院大学人間生活学部紀要、3 巻、2016、69-75　査読無

〔学会発表〕（計４件）

①<u>田中　沙織</u>、保育の条件と幼児の身体活動の関連に関する研究、日本保育学会、2014 年 5 月 18 日、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学（大阪府・大阪市）
②<u>田中　沙織</u>、幼児の身体活動に影響を及ぼす要因に関する研究、日本保育学会、2015 年 5 月 10 日、椙山女学園大学（愛知県・名古屋市）
③<u>田中　沙織</u>、幼児期における保育中の身体活動の現状と課題、日本体育学会、2015 年 8 月 25 日、国士舘大学（東京都世田谷区）
④田中　沙織、幼児の運動・体力・生活に関する内容－身体活動を中心に見た幼児期の生活･運動と保育現場における今後の課題－、九州体育・スポーツ学会、2015 年 9 月 13 日、西九州大学（佐賀県・佐賀市）

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　沙織（TANAKA　Saori）
広島女学院大学、人間生活学部、准教授
研究者番号：40548799